短歌部門総評

黒瀬　珂瀾

短歌、とは不思議な文芸です。「良い歌を生み出す」ことはもちろん大切ですが、それと同じくらいに、「短歌を通して世界を見る」ことが大切だと思います。そして、そのためには、歌心を胸に抱きながら生きることが必要です。「短歌を作ろう」という気持ちが心のどこかにあれば、何気なく過ごしていると見逃してしまう小さな美しさや、聞き逃してしまう誰かの小さな声に気付き、拾い上げてゆくことができるのです。

つまり、優れた歌を一首作って終わり、ではないのです。歌心をもって長い時間を生きてゆく。そうすることで、この世界の小さな喜びや悲しみを定型詩にして、隣の人にそっと伝えてゆく。そのすべてのいとなみが〈短歌〉なのだと思います。

だからぜひ皆さん、今後もそれぞれご自身のペースで、短歌と付き合っていただけると、とても嬉しいです。

応募作は全体的に、作者の感情や経験がそれぞれの形で伸びやかに活かされていました。なおかつ、苦悩や葛藤に向き合う姿が浮かび上がるものが多く、精神的な豊かさを感じさせてくれました。

その一方で、挑発的な表現、実験的な詩情も見受けられ、たびたび驚かされました。一筋縄ではい

かない作品群を前に、若き歌詠みたちの感性を、頼もしく思ったことです。

正直、最優秀作と優秀作二点の計三点に順位をつけるのは大変に難しかったです。それぞれの詩情の良所があり、優劣をつけられるものでもありませんでした。

その中でも山本菜々香さんを最優秀賞に選んだのは、一首一首の質は当然ながら、十五首の並べ方からも作者の心の動きと批判精神が伝わってくるという力量を見たからです。今現在の世界の問題と、私の小さな生活。その二つの世界が互いに行き交い、時代への批評精神が詠まれてゆく。他者と向き合う心を、伸びやかな口語調で表現した一連でした。

優秀賞の原田駿さんの、都市の風景をシニカルな視線で描いた一連も注目しました。おそらく、その心底には反骨精神を抱えた作者なのでしょう。とても発見力がある人で、さらなる向上を期待します。

同じく優秀賞の番匠夏子さん、「何かを信じる心」をストレートに描き切っていて、とても清々しく感じました。今の世の中、この心を追い求めることが難しいのです。比喩の使い方にとてもきらめきがあり、定型をよく体得している感があります。

その他、選考中に注目した、佳作の方々の歌を少しだけ挙げます。まず、樋口陽介さんの「近づいて見てるふれたいさわれないカバーガラスと対物レンズ」。授業中に顕微鏡を使ったのでしょうか。その様子をまるごと、愛しい誰かへの愛情の比喩にしてみせた。さびしさをたたえた抒情があります。樋口さんの歌は、孤独感を思わせる抒情が魅力です。

小川楽生さん。「二人の明日（あした）はアスパラに包まれてその憎しみを茹でれば夏」。破調作品です。大胆な表現の奥に、苦悩をたたきつけた感があります。小川さんの歌は、言葉の転換が鋭く、どれも迫力

がありました。このまま進んでください。

最後、平山友里香さん。「「まだ好き」をあなたが好きなマニキュアの下に埋葬　除光液切れ」。「あなた」への恋心を断つ歌でしょうか。気持ちを浄化してゆく力を感じました。切ない感情を丁寧に言語化してゆく平山さんの歌に、とてもひかれました。

全国から寄せられた様々な短歌を読むことができ、審査員としてとても幸せな時間を過ごすことができました。ご応募くださったすべての皆様に、改めてお礼を申し上げます。第二回もまた、多彩な作品が応募されることを期待しています。

そして、〈あなた〉の心が、これからも歌心の明かりとともにあることを願っています。またお会いしましょう。